9　次の文章は、『源氏物語』「胡蝶」の巻の一節であり、季節は初夏である。

光源氏は、若き日に出会い、ほどなく死別した恋人（夕顔）が、ほかの男（頭

中将）との間にもうけていた娘（玉鬘）を、二十年近くが経ってから、縁あ

って自邸に引き取ることとなった。世間には実の娘であると公表したため、

それを信じて、玉鬘に求愛してくる者も多い。これを読んで、後の問いに答

えよ。 〈九州大〉　二〇一五年度出題

　雨のうち降りたるなごりの、いとものしめやかなる夕つ方、御前の若楓、柏木などの、青やかに茂りあひたるが、なにとなく心地よげなる空を、見出だしたまひて、「和してまた清し」とうちじたまひて、まづ、この姫君の御さまの、にほひやかげさをおぼし出でられて、例の、忍びやかに渡りたまへり。

　手習などして、うちとけたまへりけるを、起き上がりたまひて、恥ぢらひたまへる顔の色あひ、いとをかし。なごやかなるけはひの、ふと昔おぼし出でらるるにも、忍びがたくて、

「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりをりこそあれ。Ａあはれなるわざなりけり。中将の、さらに昔ざまのにほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまひけるよ」

とて、涙ぐみたまへり。箱の蓋なる御くだものの中に橘のあるを、まさぐりて、

　　Ｂ「橘のかをりし袖によそふればかはれるみともおもほえぬかな

世とともの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを。なほ、えこそ忍ぶまじけれ。おぼしうとむなよ」

とて、御手をとらへたまへれば、女、かやうにもならひたまはざりつるを、いと①うたておぼゆれど、おほどかなるさまにてものしたまふ。

　　袖の香をよそふるからに橘のＣみさへはかなくなりもこそすれ

むつかしと思ひて、うつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり、肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なかなかなるもの思ひ添ふ心地したまひて、今日ぞ、すこし、思ふこと聞こえ知らせたまひける。女は、心憂く、いかにせむとおぼえて、わななかるる気色もしるけれど、

「なにか、かくうとましとはおぼしたる。いとよくもて隠して、人に咎めらるべくもあらぬ心のほどぞよ。さりげなくてを、もて隠したまへ。浅くも思ひきこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたぐひあるまじき心地なむするを。このおとづれきこゆる人々には、②おぼし落とすべくやはある。いとかう深き心ある人は、世にありがたかるべきわざなれば、うしろめたくのみこそ」

とのたまふ、Ｄいとさかしらなる御親心なりかし。

（注）○和してまた清し……『白氏文集』に「四月ノ天気ハ和シテ且ツ清シ」（原

漢文）とある。

　　　○この姫君……玉鬘。

　　　○昔……故人となった、玉鬘の母、夕顔。

　　　○中将の、さらに昔ざまのにほひにも見えぬ……息子である中将（夕霧）が、いっこうに亡き母（葵の上）の美しさを受け継いでいるようにも見えない。

　　　○橘……「橘」から、「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（『古今和歌集』夏・読人しらず）の歌が想起され、以下の二首ともに、この歌を踏まえる。

　　　○女……玉鬘。

　　　○おとづれきこゆる人々……玉鬘に恋文を贈ってくる男たち。

問１　傍線部①・②を現代語訳せよ。

◎問２　傍線部Ａ「あはれなるわざなりけり」について、光源氏はなにを「あはれ」と感じているのか、説明せよ。

 ◎問３　傍線部Ｂ「橘のかをりし袖によそふれば」について、「橘のかをりし袖」の意味を明らかにしつつ、何を何に「よそへ」るのか、説明せよ。

問４　二重傍線部「えこそ忍ぶまじけれ」を品詞分解し、例に倣って文法的に説明せよ。

（例）「過ぎつる年ごろを」

→（解答）上二段動詞「過ぐ」連用形／完了助動詞「つ」連体形／名詞

／格助詞

問５　傍線部Ｃ「みさへはかなくなりもこそすれ」を、「もこそ」の用法に注意して現代語訳せよ。

 ◎問６　傍線部Ｄ「いとさかしらなる御親心なりかし」は、語り手による登場人物への批評のことばであるが、そこには語り手のどのような思いがこめられているか、説明せよ。

問７　『源氏物語』の作者の書いた日記の中に出てこない人物を、次の選択肢

から一人選び、記号で答えよ。

ア　一条天皇　　イ　和泉式部　　ウ　清少納言　　エ　藤原公任

オ　藤原道長　　カ　菅原孝標

# 【解答と採点基準】

問１　①＝Ａ光源氏のことが、Ｂ厭わしいとＣ思われるけれども

Ａ＝３／Ｂ＝４〔「嫌だ」も可。〕

Ｃ＝３〔「お感じになるけれど」も可。「思われる」となっていない

ものは減点２。〕

②＝Ａ男たちより、私のことを劣っているとお思いになってＢよいだろうか、いやよいはずがない。（私のことを一番にお思いなさい。）

Ａのないものは全体０。

Ａ＝６〔「男たちよりも私を」の形式でないものは減点３。「劣ると思う」の意味で取れていないものは０。「おぼし」が尊敬の意味で取れていないものは減点２。〕

Ｂ＝４〔反語でないものは０。〕

問２　Ａ初めて見た時は、それほど似ているとも思わなかったけれども、Ｂ今はまるで彼女の母の夕顔かと見間違えるほどに、Ｃ玉鬘が Ｄ光源氏の昔の恋人である夕顔に生き写しであること。

Ｃ・Ｄのないものは全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２

Ｃ＝３〔「姫君」「女」も可。〕

Ｄ＝３〔「光源氏の昔の恋人である」はなくても可。〕

問３　Ａ昔の恋人をしのばせる香りの袖の意味だが、Ｂ具体的には亡くなった美しい夕顔その人をさしており、Ｃ今光源氏の目の前にいる夕顔の娘である美しい玉鬘を Ｄ夕顔に「よそへる」つまりなぞらえると言っている。

Ｃ・Ｄが逆のものは全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝３〔「今…にいる」のないものは減点１。〕

Ｄ＝３

問４　（呼応の）副詞／係助詞／上二段（四段）動詞「忍ぶ」終止形／打消推量助動詞「まじ」已然形〔「まじ」は「打消当然」も可。〕

問５　Ａ「香だけでなく実までも」というわけでもないが、母だけでなく私の身までもＢ亡くなってしまったら困る。

Ａ＝５〔「実」と「身」の掛詞がないものは減点２。「母だけでなく自分の身も」がないものは０。〕

Ｂ＝５〔「死ぬと大変だ」も可。〕

問６　Ａ自分の娘として自邸に引き取りながら、玉鬘に女性として求愛する光源氏に対して、Ｂ最初からそうすることを考えた計算づくのこざかしい名ばかりの「親心」だとＣ皮肉を込めて批判する思い。

Ａ＝４〔「実の娘だと公表しながら言い寄る」の意味のないものは０。〕

Ｂ＝３〔「利口ぶった」も可。〕

Ｃ＝３〔「皮肉を込めて」のないものは減点１。〕

問７　カ

【現代語訳】

　雨がさっと降った名残の、本当になんとなくしんみりした夕方、お庭先の若い楓や、柏の木などが、青々と茂りあっているのが（よい前景となって）、なんとなく気持ちよさそうな空を、（光源氏は）部屋の内からご覧になって、「和してまた清し」と（『白氏文集』の漢詩を）詠じなさって、まず、この姫君（玉鬘）のご様子の、つやつやと美しいご様子を思い出しなさって、いつものように、こっそりと（姫君の元に）足をお運びになった。

　（姫君は和歌を書くなどの、）手習いをして、くつろいでいらっしゃったのに、起き上がりなさって、恥じらっていらっしゃる顔の色合いが、たいそうすばらしい。（姫君の）ものやわらかな様子が、ふと昔（姫君の母、夕顔）を自然とお思い出しになるにつけても、我慢できなくて、

　「（あなたに）初めてお会い申し上げたときは、たいして（亡くなった母親である夕顔と）このようには似ていらっしゃらないと思っていたが、不思議なまでに、本当にその人（夕顔）かと思わず思い間違える時々があることよ。しみじみとすばらしい。（息子である）中将（夕霧）が、いっこうに亡き母（葵の上）の美しさを受け継いでいるようにも見えないのに慣れて、（母子は）そんなにも似ないものだと思っているのに、このような（母親に似ている）人もいらっしゃったことよ」

と言って、涙ぐんでいらっしゃる。箱の蓋に（入って）ある御果物の中に橘（の実）があるのを、もてあそんで、

　　　「橘が香った袖（＝昔の恋人の夕顔）に（あなたを）なぞらえると、違った身（…実を掛ける）とも思われないことだなあ。

（夕顔のことを）いつの世も心にかかって忘れられないので、（心が）慰められることがなくて過ぎてきた長い年月であるのに、このように（あなたを今）見申し上げるのは、夢ではないかとことさらに思うのだけれど。やはり、とても我慢することができそうにないことよ。（私のことを）嫌だとお思いにならないでよ」

と言って、（姫君の）お手をお取りになったところ、玉鬘は、このようなことに慣れていらっしゃらなかったので、とても（問１①光源氏のことが）厭わしいと思われるけれども、おっとりとした様子で応対なさる。

　　　（あなたが私を）袖の（橘の）香（＝亡くなった母）になぞらえるせいで、（問５「香だけでなく実までも」というわけでもないが、）母だけでなく私の身までも亡くなってしまったら困る。

嫌なことだと思って、うつぶしていらっしゃる（姫君の）様子が、（光源氏にとって）たいそう心惹かれて（離れがたく）、手の様子がふっくらと肥えていらっしゃるのや、姿や、（薄衣から透けて見える）肌のきめ細やかなのがかわいらしい様子であるので、かえって物思いが加わる気持ちがしなさって、今日は、少し、思うことを申し上げなさったことよ。玉鬘は、（嫌な目にあって）困った、どうしようかと思われて、自然と身体がふるえる様子もはっきりとみえているけれど、

（光源氏は）「どうして、このように嫌だとお思いになっているのか。たいそうよく（自分の気持ちを）隠して、（他の）人にとがめられるはずもない（うまく隠している私の）心の様子であるよ。（あなたも）そしらぬ様子で、お隠しなさい。（親としてあなたのことを）浅くは思い申し上げていない（私の）気持ちに、さらに（あなたを恋人として思う気持ちが）付け加わるはずであるので、この世に例のあるはずのない（すばらしい）気持ちがするのに。あの恋文を贈り申し上げてくる問１②男たちより、（私のことを）劣っているとお思いになってよいだろうか、いやよいはずがない。（私のことを一番にお思いなさい。） たいそうこのように深い気持ちのある者は、世の中にめったにないはずのことだから、（あなたのことが）心配で（たまらないのだ）」

とおっしゃるのは、たいそうこざかしい（名ばかりの）御親心であることよ。